

【 令和5年度 卒業式『式辞』(抜粋) 】

令和6年3月1日

卒業証書を授与された百名の皆さん、三年間の研鑽が立派に実った晴れの卒業おめでとうございます。卒業はこれまでの高校生活を振り返るとともに、未来を迎える節目でもあります。洲本実業での思い出を心に巡らせながら、新生活に夢を抱いて下さい。皆さんは自然環境に恵まれたこの校舎で、人生の基礎を築くために心身を鍛え、多くの友情を育んできました。その中には、嬉しいことや楽しいことばかりではなく、苦しいこと、悩んだことなどが数多くあったことでしょう。雨の日も風の日も通学し、夕方遅くまでクラブ活動や資格試験の準備に励んでいる姿が思い浮かびます。それらを乗り越え、様々なことに努力を尽くして見事に成果を挙げました。それらすべてが、かけがえのない宝物となることでしょう。そして、時には厳しく、時には優しく皆さんの活躍や成長ぶりを見守り、よろこんでくださった、保護者をはじめ、**卒業をお祝いしてくださっているすべての方々への感謝の気持ちを大切に**して下さい。



さあ、四月からは、いよいよ新しい生活のスタートです。「夢」を是非、叶えてください。そのためには苦勞しなければなりません。**若い頃の経験や様々な苦勞と悲しみは、自分の限りない可能性を引き出すチャンス**だと思って乗り越えて欲しいものです。大切なことは、何があっても前向きに成長していこうという気持ちだと思います。「強い心」を持っているからこそ、皆さんの夢が叶うからです。

また、多くの悩みに揺れ動くかも知れませんが、決して焦る必要はありません。また、他人と比べて嘆いたり、うらやんだりする必要もありません。どこまでも自分らしく、伸び伸びと、一日一日を精いっぱい生きて欲しいと思います。その中で、大いに「学んで」下さい。「学んだ」人は様々な分野で活躍できます。

そこで、この「学ぶ」ということについて、福沢諭吉の『学問のすゝめ』の中に、ある学生の話があるので紹介します。この学生は、国を離れて長い間江戸で勉強しました。偉い先生たちの教をを毎日一生懸命書き写したところ、数年間でその写本は数百巻にもなりました。ついに学問を制覇した学生は故郷へ帰ることにし、自分は東海道を下り、写したものは船で送りました。しかし、不幸にもその船が遭難してしまい、自分自身は故郷に帰ったものの、書き写したものはすべて海に流れてしまいました。身についたものは何もなく、その学生は勉強する前と何も変わることができなかった、という話です。福沢諭吉は、「**学問の要は活用**に在るのみ。活用なき学問は無学に等し」と言って、この話を例として挙げています。書物を写すだけで、しかもそれらを失い、何の成長もなかったこの学生には、学びの基本姿勢として、「**自分の頭でしっかり考え、どうすれば学んだことを人のため社会のために使うことができるか**」という視点が欠けていたのではないのでしょうか。そう言った意味では、この学生と比べて**洲本実業生には身についたことが沢山あり、人のため、社会のために大いに活用することができる**のです。

皆さんの学びの本番はこれからです。将来、それぞれの道で活躍できる人財になって光り輝いてください。「洲本実業の卒業生はすごい。大したものだ。」と言われる人になって欲しいと思います。皆さんが光れば母校も光り、それにつれて皆さんもまた、この母校の思い出をますます良きものとしていくことでしょう。



最後にもう一つ、ある石工職人、その人の言葉を贈ります。

「田舎を歩いていて見事な石垣を見ると心を打たれることがある。どんな思いでこんなに心を込めた仕事をしたのだろう。前の者が良い仕事をしていると、後の者は雑な仕事はできないものだ。いい加減な仕事をして大雨で崩れないか、と心配しなくてもいいように、いつも良い仕事をしておきたい。そうすれば後から来る者もその気持ちを受け継いでくれる。良い仕事をして人に褒められた時くらい嬉しいものはないが、**褒められなくても自分の納得のいく仕事をしたいものだ。**」という内容です。

この話は、次の世代に思いを馳せながら、人々の安全・安心を守ることを使命として、**たとえ人から褒められなくても、誰から見られても恥ずかしくない仕事をしたい**、との思いを語ったものです。それは、**自分の仕事に妥協を許さない真摯な姿勢と誇り**に満ちた言葉であり、いつの時代の職業人にとっても、最も尊く決して失ってはならない「**仕事の誇り**」とも言うべきものだと思います。

今後、職業人として社会に携わっていく皆さんが、人生においてどう進むべきか迷ったときには、この二つの話を思い出して原点に立ち返ってほしいと思います。

それでは、卒業生の皆さん、家族を心から大切に、幸せにしてあげられる人になって下さい。皆さんの健康とご活躍をお祈りしています。

令和六年二月二十七日

兵庫県立洲本実業高等学校長

朝田 正樹